

19/12/15

「作者」というペルソナと表象

野呂 康  
(岡山大学言語教育センター准教授)

本日は本研究会によろこそおいで下さいました。本日の司会を務めさせていただきます野呂と申します。当企画は「文芸事象の研究会」という、企画により構成員が変わる研究会による主催となります。まずは会場をご提供くださり、また本日の設営等にご尽力くださいました慶應義塾大学商学部の御園敬介先生に御礼申し上げます。

さて、本企画は「＜表象＞のパスカルーパスカル学への新たな寄与の試み」と題し、三回の公開研究会で構成されます。第一回は大阪大学、第二回は岡山大学で開催し、本日が最終回となります。

各回に共通しておりますのは、石川知広先生の御講演、続いて今回の主旨に同意していただいた17世紀フランス文学、哲学、歴史学の研究者による発表、そして登壇者による対話、以上のような形式となります。本日もお越しいただいた石川知広先生は今年度をもって御奉職先である首都大学東京を退官されます。そこで、後進の研究者に先生のパスカル観をご披露いただきたい、加えて、他の研究者と直接の対話をしていただくことで共通の認識を探る、あるいは視点や方法論の差異を際立たせることができなかと考えた次第です。但し、単なる講演会では知識が一方から他方へ流れるだけで終わるかもしれません。そこで先生には講演だけではなく、各発表者の発表に簡単なコメントをつけていただき、それを基に発表者全員で話し合う「鼎談」という形式を採用いたしました。この対話には時間の許す限り、会場からも疑問を表明するという形で参加していただき、自由な論争の場としたいと考えております。そうした想いを込めて、本企画では敢えて講演会ではなく、公開の、それも研究会という形式をとりました。

さて、本日は最終回ということで、パスカルの代表作といわれる『パンセ』に関する話が中心となりますが、この文学史上の聖典を語る上で、どうしても歴史と表象という、やや大げさな二つの言葉を避けるわけにはいきません。

ご存知の通り『パンセ』とは、パスカルが生前書き溜めたテキストを、パスカルの死後数年の後、知人たちが印刷・出版したものです。1670年に最初の版が出て以来、21世紀の現代に至るまで、何度となく「書物」として提示されてきました。詳細については石川先生がお話しくださいますので、ここでは粗雑な紹介で失礼しますが、これまでに出版された書物で1冊として同じものはありません。それは出版社が異なるとか編者が違うとか、複数の訳者がいるというようなことばかりでなく、そもそもパスカルの残した原稿をどのように読むかという編集者あるいは読者の、書物を前にした態度に由来する事態なのです。1冊として同じ書物がないというのは、新たに書物化を試みる場合、テキストと格闘するばかりではなく、これまでの版本の方針を確認し、自分の考えをまとめ提示するわけで、编者個人が『パンセ』という「書物」をどのように想い描くか、350年の編纂の歴史の中に、どのように自分の書物を位置づけるかという表象の作業が前提となるためです。『パンセ』を考えるには、必然的に歴史を意識せざるを得ないわけです。

また一つ付随するのが、作者としての「パスカル」を表象するという作業です。こちらは大枠のみの説明で恐縮ですが、一例を挙げますと、パスカルは執筆にあたり、幾つかの規則を設けていました。少し行間を空けて書くとか、余白を残しておいて後に書き込むとか、時に独自の記号を用いて、読解の順を示しているテキストまであります。本日の広報のオモテ面をご覧ください。右端がパスカルのテキストですが、綺麗に縦が揃っているのですがその左端に書き込みがなされています。こうした書き込み、執筆の癖のようなものは、いたるところで確認できます。こうしたテキストを1冊の書物として、直線的に読書が

できるように編集するのは大変な苦勞を伴う作業ですが、こうした作業を行う際には必ず、まずは生前のパスカルを知っている人物による伝記記述が参照され、作者としての意図、あるいは、これこれの執筆の癖があったというような確認が予めなされてから、テキストが配列されます。要するに、テキストだけを見て『パンセ』を編集するのではなく、必ず作者としての「パスカル」が想定されるのです。哲学者のルイ・マラン、そしてその問題意識を受け継ぎ『パスカル—の—賭け』を最近上梓したアラン・カンチオンは、実在のパスカル、語り手としてのパスカルではなく、常に既に『パンセ』に内包されたパスカルという形象を位格（ペルソナ）と名付け、『パンセ』という書物の編纂作業と不可分のものとして分析対象としています。ここでも大雑把に言えば、『パンセ』について語るとは、こうして書物の生産原理上必然的に組み込まれた想定上の作者「パスカル」をどのように把握するか、表象するかという行為と切り離して考えることはできないのです。そしてそうした表象が、『パンセ』という書物の生産原理に関わるとすれば、『パンセ』について語るとは、その時代の言葉（言説）への参入行為に他なりません。

このような簡単な説明からも、『パンセ』には1冊として同じ書物はなく、書物として提示された瞬間に、同時代の、いわば言説状況や歴史と必然的に関係を切結ぶということがご理解いただけると思います。

最初の『パンセ』が公にされた時点で、実体としてのパスカルは既に故人でした。以降、パスカルの残したテキストと死者としての、あるいは作家としてのパスカルは、出版の毎にその都度形象を変化させながら、常に既に「書物」につきまといてきました。そしてフランスの国立図書館に保管されたパスカルの残したテキストは今や国宝級であり、ほとんどの読者、いやほとんどの研究者さえ、電子テキストや複写を通して間接的にしか読むことができません。辛うじて、隠しつつ見せるといった、半透明のトレース紙を挟んだ状態で、それも読みつつもしかし触れられず、想いを馳せるしかないというもどかしい状態にあるわけです。

本日は、石川先生の他に、歴史学と思想史を専門とする二人の研究者にも御登壇願います。扱っていただくテーマ自体は異なりますが、お二方とも歴史あるいは歴史記述の問題についてお話していただけます。すなわち、歴史をどう書くか、あるいは歴史は史料としてのテキストから、どのように構築されるかという観点から見れば、『パンセ』という書物の内包する問題と無関係ではありません。

長くなりました。それでは、石川知広先生に御登壇願います。

石川先生は現在、首都大学東京人文科学研究科に御勤めで、御専門は17世紀フランス思想・文学、主として、パスカルを始めとするポール＝ロワイヤル・グループとその現代的意義についての研究をされております。本日のお話は決して完成することの無い『パンセ』という書物についてのお話と御伺いしております。それでは石川先生、よろしく御願います。

\*\*\*\*\*

石川先生、有り難うございました。

（それでは10分程度、質疑応答の時間を設けたいと思います。どうぞ、肩書きなどに関係なく、御自由に、想い浮かんだ御質問をなさってください。）

\*\*\*\*\*

それでは、ここで10分程度の休憩を入れまして、15時30分から再開いたします。

\*\*\*\*\*

それでは再開いたします。続きまして、慶應義塾大学商学部准教授の御園敬介先生に御登壇願います。御園先生は近世フランス思想史、特にジャンセニズムをめぐる宗教論争を主たる研究テーマとされています。フランスで上梓されました御著書では、アンチ・ジャンセニストであるレオナルド・ド・マランデに関するモノグラフィを書き、その後は運動としてのジャンセニズムの「生成」に着目し、反ジャンセニズムの側からジャンセニズムを捉え直すという立場から、画期的な業績をあげておられます。それでは御園先生、よろしく御願います。

\*\*\*\*\*

御園先生，有り難うございました．ここで石川先生に簡単なコメントをしていただくことになっております．

続きまして，嶋中博章先生に御登壇願います．嶋中先生はフランスでDEAを取得後，関西大学大学院で博士号（文学）を取得されました．専門は近世フランス史．エクリチュールと政治という観点から，太陽王時代について研究しておられます．御著書として，『太陽王時代のメモワール作者たち－政治・文学・歴史記述』（単著，吉田書店，2014年）など，また共訳の形でイヴ＝マリー・ベルセ『真実のルイ14世－神話から歴史へ』（共訳，昭和堂，2008年），コレット・ボヌ『幻想のジャンヌ・ダルク－中世の想像力と社会』などを（昭和堂，2014年）出版されています．

\*\*\*\*\*

有り難うございました．それでは石川先生，コメントをお願いします．

10分間の休憩をいれたいと思います．再開後は，本日お話しいただきました三人の先生方に御登壇願ひ，鼎談の形で議論を深めていただきたいと存じます．

\*\*\*\*\*

それでは鼎談に入りたいと思います．鼎談の題名は「書物，あるいは歴史＝記述のアポリア」となります．よろしく御願ひします．  
（会場からの質問も受け付ける）

\*\*\*\*\*

それではそろそろ本日の会を終わりたいと存じます．  
本日を締めくくりにあたり，石川先生から一言いただければ幸いです．如何でしょうか．

本日はお休みのところ御足労いただき，感謝の言葉もありません．懇親会は19時より，駅の近くの「たつ吉」で開催いたします．出席される方はどうぞ移動されてください．有り難うございました．